

日本經濟思想史論集

杉原 四郎著

未 來 社

日本経済思想史論集

1980年9月1日 第1刷発行

定価 4800 円

著 者 杉 原 四 郎

発行者 西 谷 能 雄

発行所 株式会社 未 来 社

東京都文京区小石川3の7
振 替・東 京 8 7 3 8 5 番

乱丁・落丁本はおとりかえします。

(第一印刷・今泉誠文社製本)

仮営業所

東京都豊島区駒込1—3—15

電話 03—943—6841～4 番

期間 1980年5月15日～1982年4月30日

はしがき

本書は、一九七二年に『西欧経済学と近代日本』を刊行してから後に引き続いておこなってきた近代日本経済思想史に関する研究の成果をとりまとめたものである。第一部「導入史の諸相」、第二部「経済雑誌の変遷」、第三部「河上肇研究」という三部構成も前著と同様である。ただ前著では第一部の標題が「導入初期」とあったのを本書では「導入史」と変更したのは、本書の第一部では明治の初期だけでなく明治末期までを視野に入れている（とりわけ第三章で）からである。また第二部と第三部との標題は全く同様であるが、第二部では、前著では明治時代の雑誌に限られていたのに対して本書ではあらたに大正時代の経済雑誌をとりあげているし、第三部でも明治・大正の河上肇だけでなく昭和に入ってから彼の業績にも筆をのびしている。こうして本書は、前著での問題意識と展開の方向を基本的にうけつぎながら、それを幾分なりとも一層前進させようという意図をもって書かれた諸論文を編集したものである。

はしがき

前著の刊行後私は本書の他につぎの二著を公けにした。(一)『河上肇 学問と詩』（新評論、一九七九年一〇月）、(二)『近代日本経済思想文献抄』（一九八〇年三月、日本経済評論社、一九八〇年三月）。(一)は一海知義氏との共著で、河上肇生誕百年を記念して学者であるとともに詩人でもあった河上肇の人間像を描こうとしたものであり、(二)は私の近

代日本経済思想研究の中から文献考証的・資料紹介的な性質の強い論稿ばかりをあつめたものである。いずれも内容的に本書の叙述を補足するところがあるので、参照していただけると幸いである。

私は甲南大学の国内留学制度によって一九七五年度東京大学に留学し、主として法学部の明治新聞雑誌文庫で研究に専念することができた。また本書の出版に対し甲南大学の伊藤忠兵衛基金から一九七九年度の補助金を得ることができた。このように研究とその成果の刊行とに多大の便宜をあたえられことに対し、甲南大学と東京大学の関係者の方々に私は深く感謝している。

一九八〇年三月

杉原 四郎

日本經濟思想史論集

目次

はしがき	一
------	---

第一部 導入史の諸相

第一章 明治初期における欧米経済書の伝来	一三
----------------------	----

——『諸官廳所藏洋書目録』を中心として——

はしがき	三
------	---

一 経済書の内容と所蔵場所	一五
---------------	----

二 英経済書の所蔵場所	二〇
-------------	----

三 仏・独経済書および法律書	二四
----------------	----

むすび	二〇
-----	----

第二章 フェノロサの東京大学講義	三
------------------	---

——阪谷芳郎の筆記ノートを中心として——

はしがき	三
------	---

一 フェノロサの講義と阪谷の筆記	三
------------------	---

二 哲学史ノート	四
----------	---

三 理財学ノート	四
----------	---

むすび	五
-----	---

第三章 近代日本黎明期のスミス……………五

——『国富論』の本邦初訳を中心として——

一 『富国論』の刊行（明治一五—二二年）……………五

二 『富国論』刊行の背景（その一）……………六

三 『富国論』刊行の背景（その二）……………七

四 西欧文化の導入を支えた人々……………六

第四章 経済学導入史上のアメリカ……………八

——明治経済学史の一側面——

はしがき……………八

一 お雇い外国人とアメリカ留学生……………七

二 アメリカ経済書の伝来……………三

三 アメリカ経済書の邦訳……………九

第五章 関西法律学校校長吉田一士……………一〇

一 啓蒙的知識人……………一〇

二 関西法律学校校長……………一四

三 関西法律学校講義録……………一八

四 『商業学通信講義』……………二三

五	大日本風俗改良会……………	一五
六	むすび……………	三〇
	補論 『経済叢話』と関西法律学校……………	三三
	はしがき……………	三三
一	関西法律学校との関係……………	三三
二	内容の概観……………	三七
三	吉田一士の役割……………	四二

第二部 経済雑誌の変遷

	第一章 『東京経済雑誌』のアダム・スミス……………	四七
	はしがき……………	四七
一	田口卯吉の自由主義……………	五〇
二	田口以外の人々の論説……………	五五
三	大正時代のスミス論……………	五九
四	スミス生誕二〇〇年記念……………	六六
	第二章 明治後期の経済雑誌……………	七五
	〔I〕博文館の経済雑誌……………	七五

はしがき	一五
一 三種の実業雑誌	一六
二 『農業世界』と『地球』	一七〇
三 『東京商況月報』と『通商彙纂』	一七三
むすび	一七六
〔Ⅱ〕浜田健次郎と雑誌『経済』	一七九
〔Ⅲ〕河上肇と『日本農業雑誌』	一九
第三章 大正時代の経済雑誌	三五
〔Ⅰ〕学術経済雑誌	三五
一 知識層とアカデミズムの形成	三五
二 前期（大正一——八年）	三九
三 後期（大正九——一五年）	三四
むすび	三四一
〔Ⅱ〕一般経済雑誌	三四三
はしがき	三四三
一 明治から大正へ	三四四
二 前期（大正一——八年）	三五二

三 後期（大正九——一五年）	二五
四 社会・労働雑誌	二六
むすび	二五

第三部 河上肇研究

第一章 『人類原始ノ生活』について	二六
-------------------	----

はしがき	二六
------	----

一 意図と構成	二七〇
---------	-----

二 学界の反響	二七四
---------	-----

三 引用文献	二七〇
--------	-----

むすび	二七〇
-----	-----

第二章 初期の経済学史講義	二八四
---------------	-----

はしがき	二八四
------	-----

一 『経済学史雑誌』（一九一〇年度）	二八六
--------------------	-----

二 『経済学史』（一九一二年度）	二九四
------------------	-----

三 初期講義の意義	三〇三
-----------	-----

第三章 『貧乏物語』小論	三〇六
--------------	-----

一 刊行史	三〇六
二 内容の要約	三〇
三 限界と意義	三七
四 書誌的補論	三五
第四章 河上肇のJ・S・ミル論	三二
一 遺稿「ミルの恋」	三二
二 社会主義論	三四
三 学史での位置づけ	三四
四 学史から消えたミル	三四
第五章 一九二四年度の経済学史講義	三八
はしがき	三八
一 構成と緒論	三五〇
二 重農学派	三五三
三 アダム・スミス	三五七
四 マルサスとリカードウ	三六一
五 カール・マルクス	三六五
むすび	三六八

第六章 『資本論入門』への道……………三〇

はしがき……………三〇

一 一九一九―一九二三年……………三七

二 一九二三―一九二七年……………三七

三 「略解」と『入門』との対比……………三六

四 『入門』の分冊版から合冊版へ……………三五

五 『資本論』第二・三部の「略解」……………三〇

索引

I 明治時代の経済雑誌……………1

II 大正時代の経済雑誌……………111

III 日本人名……………v

IV 外国人名……………xiii

第一部

導入史の諸相

第一章 明治初期における欧米経済書の伝来

——『諸官廳所蔵洋書目録』を中心として——

は し が き

ここにとりあげる『諸官廳所蔵洋書目録』は、明治一五（一八八二）年に太政官記録課から「法律之部」と「經濟之部」との二部が発行されたものである。最初に出た「法律之部」の「緒言」にいう、「近時諸官廳ニ於テ西洋書籍ヲ購求スル者日ニ多ク月ニ盛ナリ。然レドモ皆諸官廳各自ノ蒐集藏畜^{アツ}スル所ニシテ、其彼此有無相通ズル事ニ至リテハ未ダ其便ヲ得ザルガ如シ。是レ主トシテ諸官廳ニ通ゼル總目録ノ設ナキニ由ル。前ニ内閣命アリ。遍ク院省使ニ告ゲテ所蔵洋書ノ目録ヲ出サシム。本課乃チ其出ス所ニ拠リ、略其次序ヲ正シ、此ニ諸官廳所蔵洋書目録ヲ編シ、之ヲ官廳ニ頒ツ。希クバ有無緩急各廳今ヨリ流通ノ便ヲ得ル事アラント云爾」と。またその凡例にいう、「編次ノ法、原書ノ種類ニ因リ分テ法律、經濟、政事、兵事、哲学、文学、理学、歴史、地理、工芸、字書、諸報告、雜誌等ノ一三部門ト為シ、各門中又英仏独語各国語ヲ以テ之ヲ別ツ」と。これによって本目録の刊行の意図ならびにその編別構成はあきらかであるが、この洋書目録の刊行が明治一五年四月に刊行された「法律之部」と同年一

二月に出た「経済之部」の二部だけで中絶してしまったのは、明治一七年に設立された太政官文庫——翌一八年内閣文庫と改称された——が各官庁に分散所蔵されていた図書をすべて一ヶ所にあつめて集中管理することになったからである。当時内閣文庫の所蔵した書物の数は和漢洋書合せて約四〇万冊にのぼったが、その中の洋書に関する目録は、内閣記録局によって明治一九年にまずフランス語の書物のそれ (*Catalogue des Livres Français*) とドイツ語のそれ (*Katalog der Deutschen Bücher*) とが、翌二〇年に英語のそれ (*Catalogue of Books in English Language*) が相次いで刊行された⁽²⁾。洋書が諸官庁で独立に蒐集・管理されていた頃に出された前記の目録が、内閣文庫によって統一的に蒐集・管理されるようになってから出されたこれらの目録にうけつがれたわけである⁽³⁾。

私は内閣文庫になってから出された洋書目録のことを数年前に知り、当時まだ皇居大手門内にあった内閣文庫でこれを閲読、経済学導入史の資料として使ったことがある⁽⁴⁾が、当時はこの目録の前身として明治一五年にすでに二種の目録が太政官から出ていることを知らなかった。その後内閣文庫の福井保氏の御教示によってその存在を知り、現在では千代田区北の丸公園に創立された国立公文書館の一部となった内閣文庫を一九七二年夏おとずれて、この貴重な二冊の資料を見ることができた。太政官記録課の目録シリーズが二冊で中絶したことは残念であるが、法律と経済とに関する洋書目録が、内閣文庫の洋書目録の刊行よりなお数年前の明治一五年という早期に、しかも各官庁の所蔵別をもしめすかたちで刊行されたことは、西洋の社会科学のわが国への導入史を研究するものにとっては、きわめて有益な基礎資料を提供するものとして、よろこばしいことである。本章ではこの二つの目録、とりわけ「経済之部」を中心として、その内容を紹介しつつ、明治初期における欧米経済書のわが国への伝来状況について考えてみることにしよう。